

共同研究奨励金グループ活動報告 (2001－2002年度)

グループ名

西洋文化の受容—思想と言語—

研究テーマ

近代日本における西洋文化受容の総合的研究

構成メンバー

浅山佳郎・伊坂青司・岡島千幸・岡野哲士・鈴木修一・孫安石・高野繁男（以上、外国語学部）、吉井蒼生夫（法学部）・池上和夫（経済学部）

研究の目的

本研究会は、上記のテーマにより、2001-2002年度の、神奈川大学共同研究奨励金を受けた。近代日本において西洋文化がいかに受容されたか。明治7年から8年にかけて刊行された『明六雑誌』をテキストに、その精読と討論・調査・研究を基本に、共同研究によって、多面的総合的に行ってきた。

『明六雑誌』は、日本が近代化するに当たって西洋文化を受容する過程で決定的な役割を果たしており、その影響は文献の翻訳紹介のみならず、近代日本における思想文化の形成に及んでいる。その意味で『明六雑誌』を媒介とする西洋文化の受容は、現代日本の思想文化の原点をなすものである。

その内容は多岐にわたる。個人の専門領域からだけの研究では限界があり、多角的な共同研究が有効であるとの前提から、本学の哲学・倫理学・歴史学・言語学・法律学・経営学を専門とする教員を構成メンバーとしている。

研究会の開催

2001年度

- ① 例会 『明六雑誌』の精読と内容の検討；背景にある西洋思想や制度、日本の近代化を取り巻く事件や人物、新しい言語の創造などについて検討する。9回実施
- ② 箱根保養所での研究会 1泊2日（2001年11月10、11日）
- ③ 中国・上海社会科学院、上海図書館、南京図書館の調査。（2002年3月11～18日）

中国は日本より先に開国し、英学の科学書や『聖書』を翻訳、また「英華字典」を編集した。日本はこれを鎖国中や英語に不案内な期間に輸入し利用した。とくに、1868年に上海に開設された江南製造局翻訳館は199点の英学書を翻訳し中国西学が飛躍的に発展した。日本でも、後にその制度を取り入れ、文部省編纂局が開設され英学書の翻訳のセンターとなった。江南製造局翻訳館が翻訳した訳書は日本にも輸入されたが、今日では、ほとんどが散逸している。今回の上海図書館の調査で、そのすべての訳書を同図書館が所蔵されていることを確認すると共に、その一部を閲覧することができた。これらは『明六雑誌』の基礎的な資料になったものである。今後の課題の発見につながる多くの成果を得た。

（参加者、伊坂青司・鈴木修一・孫安石・高野繁男・吉井蒼生夫）

2002年度

① 例会 前年度に続き、月例会をもった。7回実施

『明六雑誌』の講読研究会は、研究奨励金を受ける前からのもので、4年の期間にわたる。この例会には、本学の非常勤教員や他大学からの参加者もあり、予想以上の賑わいになった。ひとまず、全43号の大部分を読む見通しになった。

② オランダ・ライデン大学での調査。(2002年9月3日～15日)

文久2年「幕府オランダ留学生」が派遣される。総勢15名、その中に『明六雑誌』の主導者となる、西周・津田真道が含まれ、そのほか榎本武揚・内田正雄・田口良直・伊藤玄伯・林研海などが派遣された。その後の、日本の近代化の主導者となって活躍したメンバーたちである。

1) ライデン大学での調査

西周・津田真道がライデン大学で講義を受けたフイッセルグ教授の自宅（日本の留学生が訪問したり指導を受けた場所）、および西・津田の下宿先などの視察。

ライデン大学図書館・日本語学科図書室の閲覧（日本人留学生が使用したテキスト・参考書などの閲覧）

ライデン大学関係者・日本人大学院生たちとの研究交流。

ライデン市立古文書館の調査。

2) 西・津田・箕作秋平ら日本人留学生の手紙や写真などをCDにコピーし持ち帰った。また、1862年にライデン大学が編集発行したオランダ語、日本語対照の『Japan in Laiden / The Honorable Visito / 誉れ高き来訪者』をライデン博物館で入手した。

3) ライデン大学・法学部

法学部研究室・ゼミ室は、旧監獄の建物を利用している。

4) シーボルト植物園

ライデン大学の構内に造られた広大な公園で、園内には植物研究所と共に、シーボルトが日本から持ち帰った樹木、花の類が育ち、まるで日本にいるような雰囲気であった。

※ライデン市、および大学での調査には同大学日本語学科教員・大屋則夫氏の全面的な協力と便宜を受けた。

(参加者 浅山佳郎・鈴木修一・吉井蒼生夫・高野繁男)

結びにかえて

『明六雑誌』は、これまで近代史の資料として用いられた。本研究会のように、思想・法律・経済・歴史・言語などの多面的な視野から総合的に共同研究されることはなかった。現代のようなグローバルな時代をむかえ、日本は、今後どのような方向に向かうのであろうか。日本が、近代化の名のもとに西洋化に向けてひた走った原点として『明六雑誌』を位置づけ、改めて現代の視点から「西洋文化の受容」を総合的に問い直そうとするものである。

来年度は、これまでの成果を最大活用し、共同研究のテーマに沿って、個個人の専門の立場から、これまでの検討を生かした論文集の出版を目指している。

(記録・高野繁男)